Vene Investment

Venezuela Weekly Report

No.４２９　２０２５年１０月２２日（水曜）

（写真）ベネズエラ・カトリック教会　“１０月１９日　ベネズエラの偉人２名が列聖、ベネズエラ初の聖人に”

ベネズエラ聖人の偉業と奇跡

株式会社ベネインベストメント
松浦　健太郎

１０月１９日　バチカンのサンペドロ広場にて、ベネズエラ人２名（医師ホセ・グレゴリオ・エルナンデス、修道女マリア・カルメン・レンディレス）が正式に列聖した。

ベネズエラ出身者の列聖は今回が初めてで、カトリック教徒の多いベネズエラにとっては非常に栄誉あるイベントだった。

この機会に、両聖人の生い立ちや偉業、列聖を決めるに至った奇跡の内容について紹介してみたい。

「列聖」とは信者に崇敬を許可すること

そもそも「列聖」とは、カトリック教会が特定の人物を正式に「聖人」と認識し、全世界の信者に崇敬を許可することを意味する。教皇がその人物の生涯・徳・奇跡を審査し、「この人は天国にある確信があり、普遍教会で聖人として崇敬できる」と正式に宣言する行為である。

「列聖」が認められるためには基本的に３つの要件を満たす必要がある。
１つ目は、「その人物が生涯において道徳的な偉業を果たした模範的な存在であること」。２つ目は「その偉業ゆえに人々から尊敬を受けていること」３つ目は「その人物に由来する科学的に説明不能な奇跡が存在すること」である。

「貧者の医師」と呼ばれた聖人

ホセ・グレゴリオ・エルナンデスは１８６４年、ベネズエラ西部のトゥルヒージョ州で生まれた。

彼は幼少期から学問に秀でており、医学を志してベネズエラ中央大学医学部に進学し、卒業。
その後にパリへ留学し、当時最先端の細菌学や臨床医学を学び、ベネズエラ帰国後は医科大学教授として学生を指導する傍ら、国内の医療制度改善にも尽力した。

ホセ・グレゴリオ・エルナンデスの偉業を一言で表現するのであれば「社会的弱者への無償医療」である。

裕福な患者から得た収入を貧困層の治療費に充て、貧しい人々の家を訪ね歩く姿から「貧者の医師（el médico de los pobres）」と呼ばれた。

さらに彼は敬虔なカトリック信者でもあり、聖職者を志した時期もあったという。彼の宗教的な倫理観が「貧者の医師」と呼ばれるような活動の原動力になったとされている。

ホセ・グレゴリオ・エルナンデスが亡くなったのは１９１９年６月（享年５４歳）。カラカスで病人を助けようと道路を横断中、自動車にはねられて亡くなった。

死後、ベネズエラ国内で「貧者の医師」としての彼への信仰が急速に拡大。ホセ・グレゴリオ・エルナンデスへの祈りにより病気が治癒したなど奇跡の証言が相次いだ。

頭部に被弾したが、奇跡的に回復

２０１７年３月　当時１０歳の少女ヤスリ・ソロルサーノ・オルテガ（下写真の少女）が、グアリコ州Mangas Coveras 近郊で父親と移動中に強盗に遭遇して銃撃を受け、頭部に被弾した。

現場がへき地で病院への移動に時間がかかったこと、病院到着後も脳外科医の医師が不在だったことを理由に手術の着手まで約７時間を要したという。

少女の怪我は深刻で、主治医は手術に成功しても、運動・言語・記憶・視覚に重篤な後遺障害を残す可能性が極めて高いと家族に説明していた。

母親は手術前後、ホセ・グレゴリオ・エルナンデスの奇跡を祈り、手術から４日が経過。状態が顕著に改善し、頭部を負傷してから２０日後には歩行・会話が可能になり、正常な状態で退院した。

２０１８年１２月に追跡診断が行われた際、脳内に損傷は残っていたが、臨床的には無症状で、医師の予後説明に反して重篤な後遺症を示さなかった。

本件が「科学的に説明不能な奇跡」と判断された事例である。

左腕を欠損した偉大な修道女

マリア・カルメン・レンディレスは１９０３年、カラカスに生まれた。

彼女は生まれつき左腕が欠損しており、幼少期から義肢を用いて生活した。にもかかわらず、その不自由を言い訳にせず、信仰と奉仕の道を歩んだ人物として知られている。

マリア・カルメン・レンディレスは、１５歳から修道女を志していたが、体が弱くしばらくは入信できず、病気が安定した２４歳（１９２７年）にフランス系修道会「聖体におけるイエスのしもべ」に入信。１９６５年に修道会「ベネズエラ・イエスのしもべ」を設立した。

なお、彼女が修道会「ベネズエラ・イエスのしもべ」を設立するに至った経緯として、フランスの修道会総本部がベネズエラで新たな団体を設立しようとしたが、新団体の方針がマリア・カルメン・レンディレスの思想にそぐわないものだったという。

そこで、彼女は、ホセ・ウンベルト・キンテロ枢機卿の助けを借りて、フランスから独立した修道会を設立したという。

この修道会は教育・福祉・布教を使命とし、医療施設としても活動した。

彼女は生涯にわたり修道会の拡大に尽力し、弱者を助けた。障害を抱えながらも多くの信徒に勇気を与えた偉業が列聖の大きな理由である。

なお、マリア・カルメン・レンディレスは、１９７４年に交通事故に合い両足に重傷を負い、亡くなる１９７７年まで車いすでの生活を余儀なくされた（享年７４歳）。

（写真）Wikipedia、Allsaintstories

外科医、奇跡的な右腕の回復

ホセ・グレゴリオ・エルナンデスの事例と同様に列聖するためには奇跡の認定が必要になる。

彼女の列聖の決め手となった奇跡のエピソードは以下の通り。

２００３年、カラカスの Miguel Pérez Carreño 病院の外科医 Trinette Durán de Branger 氏は手術中にミスが発生し、右腕に電気ショックを受け、三本の指が動かなくなる神経損傷を患ったという。

複数の医師が治療を続けたものの、事故から２カ月ほど改善がなく、改善が困難と考えられていた。

Trinette Durán de Branger 氏は、治療を続けながら、マリア・カルメン・レンディレスに信仰的な祈りを捧げ続けたという。

ある日、マリア・カルメン・レンディレスの肖像画の前で祈りを捧げていた時、突然、肖像画から“光”が見え、腕に暖かさが走り、瞬時に麻痺が消失し、指の動きも回復。手術を実施されることなく、完全回復した。

この奇跡的な回復が「医学的に説明不能」と認定され、列聖が承認された。

喜ばしい宗教行事も政治衝突避けられず

ホセ・グレゴリオ・エルナンデスおよびマリア・カルメン・レンディレスの列聖はカトリック教徒が９割を占めるベネズエラにとって明るいニュースであり、政治的な隔たりを超えた喜ばしい出来事だったと言える。

しかし、本件でも政治的な衝突を避けることは出来なかった。

列聖式の前日の１０月１８日　ローマ市内では、マドゥロ政権による人権侵害や政治犯問題を訴える反対派活動家が、ローマ市内で抗議デモを実施し、「政治犯を解放せよ」と書かれたプラカードを掲げる姿が報じられた。

また、バチカンで行われた列聖式には、マドゥロ政権の政府代表やその家族らが出席したが、野党支持者らは、政府関係者が列聖式典に出席することを「信仰の政治利用」と訴え、カトリック教会の倫理観を批判した。

他、列聖式の祝賀イベントでは、Edgar Beltrán 氏（ベネズエラ出身のバチカン・ジャーナリスト）がカトリック教会の代表に対して、マドゥロ政権関係者が列聖式に参加していることに対して質問を実施。

この質問を受けて、一般人（正確には不明だが、マドゥロ政権関係者のビジネスマンとされる人物）がジャーナリストの胸ぐらを掴んで質問を制止させるなど暴力的な騒動も起きたと報じられている。

バチカンのピエトロ・パロリン枢機卿（過去、バチカンのベネズエラ駐在大使を経験）は、説教の中で、聖書の内容を比喩的に用いて
「不当な監獄を開き、足枷の錠を解き、抑圧された者を解放し、あらゆる束縛を打ち破れ」と発言。
「政治犯の解放を求める」と理解できるような婉曲的な説教を説いたという。

以上